

きれいな人(近藤教授のこと)

著者	守随 憲治
雑誌名	日本文学誌要
巻	7
ページ	30-31
発行年	1961-12-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019038

られたかたなのではないだろうか。

大学にはいるまえ、文学座の演劇研究生であったこともある私は芝居が好きで、大学では卒業論文に近松門左衛門を選んだのだが、四年生の夏休に先生から近松全集十何巻かを拝借し、暑いさかりに全作品のノートをこしらえたものであった。そのノートは今、なつかしいようなおかしいような私の記録としてのこっているが、その秋、近藤先生におめにかかって、全集をよみあげたことをお話しすると、先生は私の顔をみて、どうです、頭が少しおかしくなりませんでしたか。とおっしゃった。謹厳なようにいって茶目なところもありになる先生だ、と私はその時思ったのであった。

きれいな人

守 随 憲 治

近藤君が大学を出た年か、その翌年か位だったろう。弥生町の、大学の裏門の通りに、お母さんと二人で居た時分、訪ねたことがある。勿論、結婚前のことだ。門構の、中は三間位の恰好な造りだった。しかも二坪位の小さな庭もついている。庭に向って部屋の際に机が置いてあって傍に本箱が一つ立っている。その上にお父さんの写真が掛けてあった。始めて行った時は夏だったろう。玄關へお母様が出て来られて、愛想よく出迎えて下さる。

「忠義(ただよし)いらしたよ。」

って、お茶を一杯頂くと、近藤君はいきなり立上って、

「風呂へ行きませんか」

と誘うのだ。僕が汗かきであり、風呂好きであることを近藤君はよく知っていた。僕にとって、風呂こそは時にとつての饗応だ。手拭をかり、下駄をかりて、近くの銭湯まで行く。どの辺だったかは、今覚えてないが、横丁を曲がって、直ぐだった記憶がある。昼だから誰も入っていない。二人切りだ。近藤君の裸体を始めてみた。随分瘦せてるナ、と思ったが、併し骨組のしっかりした体つきだ。それよりも、惚れぼれする程きれいな皮膚だ。透通る様だ——今でもそうだろうが、新湯の中に、首までひたって、向いあってしゃべりながら、近藤君の身体を観察する。身体と同じ様に顔にも贅肉を附けてない。附くの許さぬといった方がよさそうだ。だが骨張っているのでもない。面長で鼻筋が通っていて、小さな口許がしまっている。眼鏡を外すと切れの長い眼が現れる。あの時分、役者で羽左衛門が天下の美男子を以て、自他共に許していたが、羽左衛門に知性美を加えたのが、この近藤君だと、僕はひそかに決めたのだった。

お母さんからの話だった。近藤君は子供時分から潔癖性で、夜中に便所に入る時、たとえ夫が真冬でも、寝間衣を脱いで、すっ裸になるのだそう。そういうやり方が、あんな風に色白のきれいな近藤君を生んだのだらう。しかも頭の中まで夫が、しみ込んで行ったのだらう。

その次のある日のこと、例によって銭湯へ案内されてから、一寸そこまでと誘われた。ついに行くと、池の端だったか、裏通りだったか、一寸した鳥料理屋だ。上ると、約束してあったと見えて、神戸時分の友人という某君が先着していた。やっぱり仲々の好男子

だ。紹介されて四方山の話に花を咲かせている中、桃割れの女性が現れた。甘才前だ。初々しい愛嬌のある顔立で、利巧そうな眼許をしている。いきなり近藤君の傍へ坐つて、

「どうして来てくれなかったんです」

と怨む。友人君は待つてましたと許りで、ニコニコしてる。何でも、友人君は、家がよくて、東京へ来てる間に、家からの小使で、近藤君を誘う中に、この女性を発見した。彼女は友人君よりも、近藤君のうぶな所を好いたのらしい。通人たる友人君は、寧ろそれを肴にしてるという様な順序らしい。近藤君としても嫌な相手ではなかった。さればといつて、度々呼ぶ程、資力がある訳はない。何でも、臨時の原稿料が入った時などに、日頃お母さんとの白眼めっこ、ムニャムニャいうだけのことで、その時は、友人君が適当な助け舟を出していた。僕の方は、態よく当てられた様なものだった。

まだ若いこの妓は芸も大して出来なかったのだろう。近藤君が、僕をもてなす意味か、清元を一くさりやったが、夫は自身の口三味線だった。僕の印象では、夫までに相当稽古は積んでたろうとにらんだ。そのあと友人君が、次から次と短かいものを出してた。僕は芸なしで、唯ありがたく酒だけ呑んでいた。こんなことが、二三度あった。いつも同じ顔振れだった。又いつもこの程度で、二三時間でさらりと引上げるのだ。——尤も、僕を外してる場合だって無くはなかったろうが、そこまで邪推を廻さぬ方がきれい事だ。

それから二年程経ったある日のこと。近藤君の案内をうけて、芝の赤羽橋の傍のさる料亭に入った。小粋な玄関だが、相当の家だった。女中に何とか話をしていたが、大丸髷のお神が姿を見せた。顔

を見てハット驚いた。池の端で会った、かの女性なんだ。説明を聞くと、当時東京で有名な、さる料亭の主人に眼をつけられて、お酌のままで引かされたのだそう。而してここに店を持たされたのだという。恐らくは開店してからお神の方から案内したのだろう。既に何度かの逢う瀬があったに違いない。この時は、かの友人君は居なかったが、近藤君は口数が少く、時々思い出した様に、お神と何かを話してるだけだ。どこが嬉しいのか、と聞きたい位だった。だが御兩人は結構嬉しかったのだろう。こういう席でも、近藤君という人はきれいな人だった。近藤君の思想研究も結局はこの人柄から出たのだと思う。

近藤さん

谷川 徹三

ヴァレリの「ドガについて」の中に「ドガとフランス革命」という一章があるが、その中の一挿話は、私に忘れがたいものとなっている。

一九〇四年七月二八日に、ドガは私に次のような昔の思い出を語った。

彼が四つか五つの時、彼の母は或る日彼を連れて、ル・バ夫人を訪問した。夫人は、ロベスピエールの親友で一七九四年の政変に際してピストルで自殺したあの有名な国会議員ジョゼフ・ル・バの妻